埴谷雄高作品集

河出書房新社

8

メフィストフェレス風——杉浦明平

埴谷さんの文章——篠田一士

四半世紀間の励まし——福田紀一

憧れと韜晦——後藤明生

埴谷雄高作品集8　©1978

一九七八年十一月二〇日印刷　一九七八年十一月二五日発行

著者――埴谷雄高
装画――駒井哲郎　装本――杉浦康平
発行者――佐藤晧三
発行所――株式会社河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五　電話　東京　三五五―五三一一　営業　三五五―五三二一　編集　振替　東京　〇―一〇八〇二
印刷者――多田　基　印刷所――多田印刷株式会社
製版印刷――凸版印刷株式会社
製本所――小高製本工業株式会社　定価は函・帯に表示してあります

埴谷雄高作品集——8

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戦後文学論集Ⅱ

目次

13——19 序詞——事実と真実についての断片
20——21 招かれざる酒客
22——23 田村隆一の姿勢
24——28 田村隆一『言葉のない世界』
29——33 黒田喜夫頌
34——36 安東次男『澱河歌の周辺』
37——42 木下順二『ドラマの世界』
43——44 加藤周一『ある旅行者の思想』
45——46 長谷川四郎の四季

47——49 不思議な哲学者
50——52 古賀剛のこと
53——56 中薗英助のこと
57——59 石川淳の顔
60——63 安部公房のこと
64——67 安部公房『壁』
68——69『第四間氷期』
70——71 存在のどんでん返し
72——75 吉本隆明の印象
76——79 安保闘争と近代文学賞
80——82『芸術的抵抗と挫折』
83——85 江藤淳『作家は行動する』

86——88 『小林秀雄』
89——94 現代的知性の構図
95——113 江藤淳のこと
114——118 堀田善衛と開高健
119——121 龍の法螺
122——124 開高健『過去と未来の国々』
125——127 抵抗のなかの自立
128——130 全身小説家、井上光晴
131——133 井上光晴の「最高！」
134——135 井上光晴『書かれざる一章』
136——137 『虚構のクレーン』
138——139 『死者の時』

140—141 『地の群れ』

142—143 立原正秋の印象

144—144 中井英夫『虚無への供物』

145—146 推理小説と探偵小説

147—148 いいだ・もも『斥候よ　夜はなお長きや』

149—151 闇のなかの一本の蠟燭

152—152 森崎和江と第三の性

153—154 辻邦生のこと

155—157 青年辻邦生

158—159 木星人、北杜夫頌

160—161 百の顔と百の心

162—163 北杜夫の「びつくり顔」

164—168『夜と霧の隅で』

169—171『楡家の人びと』

172—173 小川国夫の人徳と文徳

174—175 倉橋由美子『人間のない神』

176—177 澁澤龍彦

178—179『黒魔術の手帖』

180—181『毒薬の手帖』

182—184『神聖受胎』『犬狼都市』

185—186『サド侯爵の生涯』

187—189『夢の宇宙誌』

190—192 栗田勇のコレスポンダンス

193—198 苦悩教の始祖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

199—203 『悲の器』の頃
204—206 『憂鬱なる党派』の時代
207—208 『憂鬱なる党派』
209—211 真継伸彦の苦渋
212—214 現代の六無斎
215—216 現代の行者、小田実
217—220 石堂淑朗のこと
221—223 青年大江健三郎
224—225 大江健三郎『ヨーロッパの声・僕自身の声』
226—227 『個人的な体験』
228—233 対立者の論理
234—240 ロビンソンの読書

241—247 批評基準の退化
248—251 長篇の時代
252—255 灰色の人生
256—259 自己消費の情熱
260—265 政治の周辺
266—271 闇のなかの思想
272—274 価値転換への試み
275—277 多様さの傾向
278—280 私小説との距離
281—283 微笑と残虐の謎
284—286 堅固な実体感
287—289 現実と観念

290—292 二つの傾向
293—295 構成と思想の図式
296—298 インテリゲンチャ論
299—300 短篇への要望
301—305 《なし崩し》の季節
306—310 社会主義のなかの「罪と罰」
311—315 純文学の建設見積書
317—325 一冊の書物—日野啓三
327—342 解題—白川正芳

序詞　事実と真実についての断片

或る事件について新聞に書かれた五つの記事を並べて見れば、その五つとも幾つかの部分にわたつてそれぞれ互いに違つていることをわれわれは発見する。

また、自分自身がそこに書かれてみればそのひとつの記事が少なからず誤つていることに驚かされる。けれども、これが「或る個人」の角度によつて記録されたところの「事実」の特性である。

さて、ここに注目すべきことは、自分自身について書かれればそれがつねに少なからぬ誤りを含んでいると堅く知りながら、他のものについて書かれた事態については殆んどそのままそれを「事実」として受けとつてしまう偏見の根絶やしがたい頑強さである。不思議なこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com